

## 佳作 社外取締役の導入は外国人投資家を引きつけるのか



■ 広田真一ゼミ グループ5名  
杉浦 智史、亀山 翔平、  
河本絵梨子、北原 成憲、  
近岡 知美

### 執筆動機

私たちのゼミでは、毎年慶應や早稲田の他ゼミの方々と論文発表会を行っています。私たちは前期に経済実験、コーポレート・ファイナンスの勉強を通して金融に触れます。そして後期から学んだ事を活かし、チームに分かれて論文執筆を行います。私たちのチームは研究を始めて1ヶ月経ってもテーマが定まらず、苦しい思

いをしてきましたが、全員が諦めることなく探究心を持ち続けました。その結果、広田先生からの推薦を受ける事ができ、懸賞論文に挑戦させて頂きました。

### 論文の内容

近年政府は、外国人投資家を日本の資本市場へ参入させるため、社外取締役の導入、またその独立性の強化に関する施策を検討しています。そこで、社外取締役の導入、またその独立性の強化が外国人投資家を引きつけるかどうかを実証的に考察し、政府の主張が正当なものかどうかを検証しました。その結果、社外取締役の導入、独立取締役の導入には、外国人投資家の日本の資本市場への参入を促す効果はないことが明らかになりました。

### 執筆に当たったエピソード

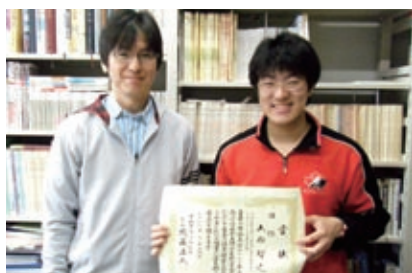
執筆に当たり、最も大変だったことが「研究データの取得」でした。研究では、

各企業がいつ社外取締役を導入したのかわかる必要がありました。そこで、私たちは東証一部上場約1600社の有価証券報告書を2000年から2009年まで全てチェックし、社外取締役の導入状況を把握しました。手作業で行うため、作業は地味でありながらもとても過酷なものでした。1週間ほどで、「一生分の有価証券報告書を見たのではないか」と思ったほどです。

### 後輩の皆さんへのメッセージ

様々な困難を乗り越え論文を書き上げたことで、私たちは1つの思いを得ました。それは、「決して諦めず立ち向かえば、たとえ学生でも社会に影響を与える論文が書ける」ということです。この思いは今後の人生において大きな自信となり、再び困難に直面した際には私たちの支えとなってくれるでしょう。ゆえに、後輩の皆さんにも早稲田商学懸賞論文に挑戦し、この自信を得て欲しいと思います。

## 佳作 日米比較を通じた資本予算評価技法の日本における実務的特徴



■ 清水孝ゼミ 大西 智之

### 執筆動機

着想から2年あまりの変遷を辿っています。テーマは、学部2年生のとき伊藤先生の管理会計論の授業で提出したレポートが原型でした。長さにして3千字あまりだったと思います。興味深いテーマだったので、卒業論文として同じテーマを扱うことにし、3万字ほど書きあげました。応募に至ったきっかけは、ゼミで清水先生に卒業論文が評価されたことです。そこから、周囲に対する

論文の評価が気になり始め、応募を決意しました。

### 論文の内容

回収期間法をご存知でしょうか。投資の経済性計算の一技法です。理論的には回収期間法は好ましくないにもかかわらず、日本企業の実務では広く用いられている実態があります。そこで、前半で米国の実務と日本の実務を比較し、日本企業の実務的特徴として回収期間法の単独利用が認められました。この「単独利用」に着目して、なぜこのような実務的特徴が見られるのかについて、後半では考察しています。

### エピソード

テーマはすんなりと決まりましたが、文献収集では苦労しました。先行研究が膨大だったために、英語文献も含めて100本以上の論文を読みました。夏休みは、毎日のよ

うにいろんな図書館に通い、論文を読み漁っていたことを覚えています。おかげで書くネタには困りませんでした。考察でいかに独創性を出すかで最後まで苦労しました。

### 後輩の皆さんへ

まずは懸賞論文に応募すること、これが第一歩です。せっかくの研究です、もっといろんな人に見てもらってしかるべきだと思います。また、2名の先生から講評がつくので、フィードバックがもらえるという点でも出す価値はあります。あと、早いうちから応募要項を手に入れておきましょう。私は、卒業論文とフォーマットがかなり違ったために体裁を整えるのに苦労しました。さらに、内容も枚数制限から削る必要があり、最初から懸賞論文用に書けば苦労せずに済んだという思いがあります。繰り返しますが、せっかく頑張った研究ですから、是非チャレンジすることをお勧めします。